放眼日中

真の交流事業とは

7月半ば、幾つかのご縁が重なり、国際交流基金日中交流センターの10周年記念パーティーに出席する機会を得た。正直、この手の周年パーティーの多くは、お偉いさんが並んで長いスピーチがあり、必ずしも楽しいものではないことを覚悟して出掛けた。ところが、今回は様子がだいぶ違っていた。300人もの出席者があったのだが、若者が目立っていた。中でも31人の高校生が目を引いた。「きょうは高校生が主役ですから、お酒は出ません」とスタッフから説明があり、乾杯もジュースとウーロン茶だった。

彼らは、このセンターが行っている高校生招聘事業「心連心」で来日した中国の若者たちで、その11カ月の留学を終え帰国前日だった。また、過去9期行われた招聘で一度日本を経験し、その後、日本の大学へ入り、卒業後も日本で活躍しているOB、OGの姿も多く見られた。優秀な若者たちから「この留学で自分は変わった。中国にいるよりもずっと良い人生が送れている」という言葉が出て、少し驚いた。

また、この会には、この高校生たちの生活を支えたホストファミリーも多数参加していた。自分の子供でも大変な、多感な時期である高校生を11カ月も受け入れるなど、自分にはとてもできないことだな、と感心した。

帰りがけに会場のホテルを出ると、タクシーに乗り込む夫婦が見えた。車が動きだすと、見送っていた女子高校生がものすごい勢いで手を振っていた。夫婦も恐らくは車内で手を振っていただろうが、暗くて見えなかった。彼女は何かを言おうと口を動かしたが声にならず、呻きながら車を追い掛け始めた。そして車が見えなくなってしまった時、「みんな大好きです」という叫び声が聞こえ、そのまま前に突っ伏して、泣きじゃくってしまった。

彼女が留学していた中国人高校生で、夫婦がホストファミリーであることは明白だった。夫婦は地方から出て来ており、家に帰るところだったのだろう。この両者の11カ月が一体どんなものであったのか、発想が貧弱な筆者には想像もつかないが、きっとぶつかり、悩み、さまざまな葛藤があったのだろう。そして彼女の叫びと涙には、日本人や中国人という国籍を遥かに飛び越えた「人間の感情」が湧き出していた。

このセンターが10周年、そしてこの招聘事業も10期と当初から行われていることには感心せざるを得ない。来賓あいさつでも「このような交流事業は、国と国の関係が微妙になると真っ先に打ち切られるもの」だと言っていたが、その通りだろう。だが、この10年の日中関係は考えるまでもなく、尖閣諸島問題をはじめ、非常に厳しい時期が大半だった。それでもこの事業が続き、10年で329人もの中国人高校生が留学したという事実は、実に評価に値する内容だと思う。

「日中友好」や「交流事業」などには懐疑的な時もあるが、このような人間的な感情の発露、このプロジェクトの名前にもなっている「心連心」、心の触れ合いは、必ず残るもの、忘れることができないものとなっていくはずだ。奇しくもこの日、モンゴルでは日中の首相が会談したようだったが、それは果たして、お互いの心に残るようなものだったのだろうか。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。